

願成寺報

平成三十年十一月十八日

〒四四〇・〇八二二 豊橋市東新町二十八番地

☎ 〇五三二一・五二一・九六〇一

報恩講のご案内

春秋のお彼岸に比べて報恩講のお参りが少ないままです。お供物やお飾りにも手間を掛けて準備します。

法要は近隣のお寺様が駆けつけて下さり、盛大に勤めます。お斎(食事)も精進ですが豪華に作ります。美味しいです。法話も多彩な方をお願いしていきます。

真宗寺院で最も大切な行事です。

今年も雅楽を願いました。

餅つき会も楽しいです、ご参加下さい。



十一月二十九日(木) 午後一時 餅つき・草取り会

十二月一日(土) 午後一時半 法要・法話 岡崎市浄泉寺 戸田栄信師

午後三時半 お非時(お雑煮)

午後四時 法要・法話 住職

二日(日) 午前十時 法要・法話 祖父江佳乃師

午前十二時 お斎(昼食) 節談説教で鍛えた円熟の法話①

午後一時半 法要・法話 祖父江佳乃師 節談説教で鍛えた円熟の法話②



祖父江 佳乃 師

名古屋市 真宗大谷派 有隣寺住職
ラジオ局アナウンサーを経て僧侶に
祖父譲りの節談説教で惹き込む

美しく生きるとは?
《佳乃先生の問い》

桜がひとつ花をつけただけで
寒くて厳しい冬を乗り越えた
人間の心が明るくなる
《祖父の言葉》



佳乃先生のDVD
『よみがえる節談説教』
方丈堂出版

二度とないかも… 乞うご期待!



戸田 栄信 師

お馴染みの恵信先生の息子さん
次世代を担う頼もしい先生が
大切にしている事は何か!

お斎(昼食)

お斎も楽しみの一つ
胡麻豆腐は坊守/住職の手作り
今年は上手に出来るかな?



餅つき/供物

雅楽・菊理(くくり)

本堂落慶法要からのご縁です
古風な調べで年中最大行事に
華を添えて下さいます



● 正信偈ノ一ト²³・善導章Ⅱ

書き直しを恐れず、今、思い浮かぶところを書き留める

開入本願大智海 行者正受金剛心

黄色の勤行本の

三十七ページから

慶喜一念相應後 与韋提等獲三忍

即証法性之常樂

本願の大智海に開入すれば、行者は、正しく金剛心を受けしめ、慶喜の一念が相應して後、韋提と等しく三忍を獲ん、すなわち法性の常樂を証せしむ、といえり。

〔浄土真宗本願寺派・注釈版聖典より〕

- ・ 本願大智海 弥陀の本願が成就した智慧の溢れる世界（浄土）
- ・ 金剛心 煩惱の障りを生きる意味に転じる強い心
- ・ 慶喜の一念 弥陀諸仏の慈悲に包まれていると慶び応じること
- ・ 韋提 王舎城の悲劇に登場する韋提希夫人のこと
- ・ 釈尊の説法（観経）にて苦悩から解放された人
- ・ 三忍 自我の疑心がなくなる（忍＝承認する心）
- ・ 法性の常樂 生死の諸条件に依らない真実の慶び

・ 得道の人を仰ぐ

月の絵を描くとき、月だけ描いてもその大きさや明るさは伝わらない。月光に照らされた山の稜線やスキ等の近景が必要だ。

十方を照らす如来の光も、光そのものは見えない。照らされたいのちの輝きを仰がなければ、その功德は知られない。如来が苦悩を救うのであれば、必ず救われた先達がある筈だ。

・ 絶望の人に説かれた教え・観経

最愛の息子が夫を獄死せしめんとし、自らも幽閉されている。王妃として尊敬を集めた韋提希であったが、賢夫人の姿はもうなく、ただ息子の将来を案ずる母の、苦悩と絶望に染まっていた。

夫人は旧知の釈尊に救いを求めた。釈尊は、侍女五百人の中で取り乱し、或いは懺悔する夫人を見て、苦悩を縁として覚りに向かう機縁が熟したと慶ばれた。『観経』は、苦悩を縁として、自縄自縛を見極め、常に働いている仏の功德を証する教えだと思う。

・ 仏と仏国土を観じる・定善十三観

仏と仏国土の姿を思惟正受せよと勧められる。思惟正受とは、精神統一して対象を想起し現実と受け止めることだが、苦悩の凡夫には不可能と思われる。けれど、信心があれば可能かも知れない。

当たり前だと思っていた日常と、今、生きていることが、奇跡だったと知りました。〔被災した女子高生の言葉〕

- ・ 日想観 ・ 水観 ・ 地観 ・ 宝樹観 ・ 宝池観 ・ 宝楼観
- ・ 華座観 ・ 像観 ・ 真身観 ・ 観音観 ・ 勢至観 ・ 普観 ・ 雑観
- ・ 往生人の因果を観じる・散善三観

どのような生き方をした人でも往生すると観ぜよと勧められる。ただし、即便往生するのは、信心の行者のみである。他の場合、仏の来迎と蓮華中での開華待ち等、往生への道程を経る必要がある。

- ・ 上輩生想 大乘仏教の善に遇える凡夫の往生を観想
- ・ 中輩生想 持戒世間の善に遇える凡夫の往生を観想
- ・ 下輩生想 五逆などの悪に遇える凡夫の往生を観想

・ 苦悩を解く信心・善導大師の三心釈

至誠心釈で、煩惱が我が凡夫には真実の行信はあり得ないとし、回向發願心釈にて、その凡夫の如来と伴なる歩みが鼓舞される。深心釈中の二種深心を左記す。信心は念仏に賜ると示された。

一には決定して深く、自身は現にこれ罪悪生死の凡夫、曠劫よりこのかた常に没して常に流転して、出離の縁あることなしと信ず。

二には決定して深く、かの阿弥陀仏の四十八願は衆生を攝受し給うこと、疑なく慮りなくかの願力に乗じて定めて往生を得と信ず。

創作・韋提希夫人の涙

今日の釈尊はどうしてこんなに輝いているのだろう…と驚いた。いつもの様にみすばらしい姿のままなのに何故…

王妃として万能の彼女は、王の友人をもっとマシにするために、多くの美しい衣服を喜捨したが、どれも着て貰えなかった。悔しくて、みすばらしくて、嫌いだっただのに何故…

教団を庇護している王の危機なのだ、どうして助けてくれないのか。父王を殺害せんとする息子を説得してくれても良いではないか。どうして息子をそそのかした卑劣な男の従兄なのか。

考えるほど釈尊に対する憤りが噴出する。悪を排する賢夫人として夫を助け、頑張ってきたがタガが外れた。濁世を呪い、死にたいと叫び、世間体を忘れて、取り乱して暴れた。

共に幽閉された五百人の侍女達は王妃に同情したが、その激しさに、部屋隅に集まって兎の様に怯えていた。王妃は、こらえきれない憤りをぶつけたくて釈尊に弟子を乞うた。けれど釈尊も現れて…その姿が眩しすぎて、涙がこぼれた。

こんな美しい方と友人だった夫は、死に臨んで悔いはないのかも…息子の将来と夫を案じ、成す術のなかった暗闇に一筋の光が射した。見ると、侍女達も同じ光に照らされてキラキラと輝いていた。王妃の証である宝飾は、光をなくして床に散らばっていた。権力を頼みとした彼女の生き方と子育ては、確かに間違っていた。

息子にもこの輝きは届いているだろうか…
いつか届くだろうか…
身命を投げて…この世界に残したいものが定まった。

親殺しの悪人でさえも救われる法を説いて欲しいと懇願して伏した。釈尊は微笑みの中でその法を説き始め、仏弟子阿難が記録した。床に落ちた涙が、大きなダイヤモンドを潤して光っていた。

王舎城の物語

大国マガタの王は、釈尊の友人で教団に精舎を寄進する人格者だ。けれど、子がないことを悩み、占術に処方を尋ねた。

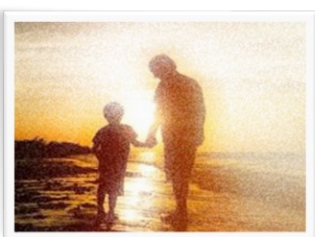
―山の仙人が三年後に命終し、太子として生まれ代わります。王は年老いていて三年が待ちきれず、その仙人を殺害せしめた。―私が王子となるならば、必ず父王を殺すだろう。

仙人は呪いの言葉を残して息絶え、王妃は男子を懐妊した。喜んだ王だが、妃の腹に比例して呪いの不安が大きくなった。王は子を塔から産み落とし、災いを消す計画を立てた。計画は実行されたが、子は死なず、手の小指を傷めただけだった。命名はアジャセだが「折指太子・未生怨」と、陰で呼ばれた。

王と王妃は、奇跡の太子を深い愛情で育て、王家は呪いを忘れた。釈尊の教団ではダイバグッタがクーデターを画策していた。アジャセに近寄り、協力者にするつもりで甘言し、信頼を得た。国を獲らせて自由にする為に、太子に出生の秘密を告げた。

太子は怨みを結び、父を投獄し、王を援ける母を幽閉した。太子が王位に就いた後、父王は獄死した。新王は、父の死を知ると、罪の意識に襲われて病に罹った。後悔の熱と心因性の皮膚病だったが、父の優しい姿を思う毎に、病状は重くなり、皮膚の瘡は悪臭を放ち、王宮の外まで漂った。

王家は様々な治療を試みたが効果はなかった。新王は最後に釈尊に教えを乞うた。病はやつと平癒し、新王も釈尊の外護者となった。王と王妃の救いは『観無量寿経』に示され、太子の救いは『涅槃経』に説かれている。



行事予定 平成三十一年

スケジュール帳に転記して、是非、ご予定下さい

一月 一日 (火・祝)	修正会 お正月のお勤めです 簡単なお節を準備します 午前十一時
三月 二十一日 (木・祝)	春季彼岸・永代経法会 (成田屋紫蝶師) 落語と法話で楽しく過ごします お非時 (昼食) あり 午前十時
八月 十五日 (木)	お盆・歡喜絵 (住職) 法要・法話で亡き人を偲びます 軽食・花火あり 午後六時
九月 二十二日 (日・祝)	秋季彼岸・永代経法会 (戸田恵信師) お馴染みの先生の情熱的な法話です お非時 (昼食) あり 午前十時
十一月 三日 (日・祝)	本山納骨堂法会・団体参拝 本山へ貸切りバスにて団体参拝します 午前六時ごろ集合
十二月 七日 (土)	報恩講 (西川舜優師)
十二月 八日 (日)	御開山聖人御恩に報いる法会です お非時 (昼食) あり 一日目 午後一時半 二日目 午前十時
二〇二〇年十二月	月例会 毎月一日 午後二時 日時変更の場合があります 寺にご確認下さい

後記

○ 女優のように煩・悩を楽しめ

樹木希林さんが九月に七十五歳で亡くなって、業績や私生活について沢山の報道があり、本当に自由な人だったと感じました。仕事ではマネージャーを置かず、FAXでオフアアを受け、興味が持てればギャラを気にせず挑んだようです。

私生活では、破天荒なロックンローラーの内田裕也さんと、別居しながらも離婚を拒否し、四十年間連れ添い(?) ました。

「彼を野に放つたら何をしでかすか分からない」

「ああいう御しがたい存在は自分を映す鏡になる」

「釈尊にグイバグツタ、難を受けながら成熟していくのが人生」

「おごらず、人と比べず、面白がって、平気に生きればいい」

「いつか死ぬるから、心配する事ないのよ」

「役者とは、自分を怒り、壊していくもの」

女優の顔をした修行僧は、癌の闘病のやつれた姿にも、だからこそと見失わない女優の顔で、明るさを伝えてくれました。彼女は「樹木希林」をすっかり見つけて、演じていたのかも知れません。

女優という仕事の中で、善導大師の二種深心のように、自分を客観視する視点を手に入れていたのだと思います。

○ 心を主とするのではなく、心の主となれ

釈尊の最後の教えは様々に伝えられますが、その中の一つです。

不遇を呪ったり、失敗を嘆いたり、納得出来ないで憤ったり、心は容易く暗く染まってしまい、大切な人を遠ざけて孤独になります。

「心の主」には、孤独に傾く心へのつかえ棒が必要です。

つかえ棒は、伝えたい大切な事柄と伝えるべき相手です。

大切な事柄は、迷いの憤りの中で見つかった仲間の足跡。

伝えるべき相手は、やがて同様に迷い慣るだろう仲間達。

「御同行」「御同朋」「ご門徒さん」と申しますが、お寺にお参りの

方々と、「心の主」の視点を育み合えたらイイナと思います。